

トランプ氏の復権は「革命」 副大統領ブレーンが予測する帝国の時代

2025/5/9 Asahi

帝国の幻影～壊れゆく世界秩序～「勢力圏」のはざまで【6】

米国は第2次トランプ政権の下、自ら第2次世界大戦後に築き上げた「リベラルな国際秩序（Liberal International Order）」を壊すような動きを見せてきました。背景に何があり、今後の世界はどうなるのか。バンス米副大統領のブレーンである米ノートルダム大学のパトリック・デニーン教授は、米口を念頭に「事実上の『帝国』によって、世界が再編成されるだろう」との見方を示します。

——あなたは第1次トランプ政権期の著書「リベラリズムはなぜ失敗したのか」で、戦後秩序を支えたリベラリズム（自由主義）の根源的な欠陥を論じました。

個人の選択を重視するリベラリズムは、成功しすぎたために失敗した。リベラリズムが成り立つには共同体の基盤が必要ですが、「成功」するにつれ、人々は共同体への帰属意識や義務の感覚を失いました。

——2023年の著書「体制転換（未邦訳）」では、「腐敗したリベラルな支配階級を平和的に転覆し『ポストリベラル（リベラル後）』の秩序を創造することが必要だ」と訴えています。

欧米のエリート層は個人の自由と選択を重視する姿勢が唯一の正しい生き方だと決めつけ、それに賛同しない大衆に対しても強要してきました。

これに対する問題意識こそ、2月にバンス氏が独ミュンヘン安全保障会議で語った、欧州のエリート批判の本質でした。米国のエリートへの批判でもあります。秩序ときずなを重んじるごく普通の人々に敬意を持つ指導者層が、リベラルなエリート層に取って代わるべきなのです。

「革命」に生存力を与えたバンス氏

——バンス氏との関係を教えてください。

彼が（デニーン氏と同じ）カトリックに改宗したころ（19年）から、教義について語り合うことを通じて親しくなり、彼が（22年の）上院選に出たころから、より頻繁に会うようになりました。

（白人労働者層の家庭に生まれ、自叙伝「ヒルビリー・エレジー」がベストセラーになった）バンス氏は、米国の「ごく普通の人々」を代表する統治を象徴しています。トランプ氏がバンス氏を副大統領候補に選んだことには、歴史的な意義があったと考えます。

———どういふことですか。

トランプ氏は（24年の）大統領選で勝つことは「革命」に近い、ということを理解していました。選挙での勝利が、リベラルなエリート層が打ち立て、永久不可侵のように思われた「体制」全体の否定を意味するからです。そして、革命を一時的な「爆発」に終わらせず、長い生存力を与えるのがバンス氏です。トランプ氏は（秩序観などの）哲学を具体的に説明するのが苦手ですが、バンス氏はそれを知的で明確な形で説き、制度化することができる人物だからです。

———「革命」と言っても、近代の民主化は「階級」を解体したのではなかったのですか。

それこそが、近代のリベラルな民主主義国家の欺瞞なのです。いま、西洋世界には明確な階級社会がある。学歴や職業などに基づく「階級」で、かつてのように出生だけで決まるわけではないが（生まれた環境により）相続される面も強いのです。人種やジェンダー、性的指向などを重視する欧米の「アイデンティティ政治」は、真の階級分断に目を向けさせないための、リベラルなエリート層による壮大な仕掛けに過ぎない。

エリート層は大衆を恐れ、その不満を表現させないようにしている。これは本質的に非民主主義的なことです。バンス氏がミュンヘンで西欧を批判したのもこの点と関わっています。もっと大衆を信じるようにならないければ、米国は欧州を支持することはできない。これがバンス氏の考えなのです。

事実上の「帝国」が再編成する世界

———米国と欧州に亀裂が入り「リベラルな国際秩序」が終わりつつあることは明確ですが、その後がどうなるのかは不明確です。

私は不明確だとは全く思いません。「リベラルな国際秩序」そのものが、ある種の虚偽に基づいたものでした。「米国は今後も、世界の一極支配を続けるための国力を維持できる」「戦後世界の帝国として、自国の意思を他国に押しつけることができる」という考えこそが、虚偽です。

(バイデン) 前政権は、ロシアがリベラルな国ではないから交渉しないという姿勢を取っていました。 きわめて危険なことです。今後 (の米国) は理念先行ではない、より現実主義的な外交を進め、世界は平和になるのではないかと思います。

トランプ政権が今、デンマーク自治領グリーンランドやパナマ、カナダなどへの権益を主張しているのは、**米国の「勢力圏」だとの発想**があるからです。

だから、ロシア側の (主張する) 「勢力圏」も理解できる。ウクライナでの停戦をめぐる今後の交渉では、ロシア語が話されているウクライナの地域はロシアの勢力圏であることを認める帰結を迎えるでしょう。ウクライナの北大西洋条約機構 (NATO) への加盟を仮に認めれば、ロシアの勢力圏を「侮辱」することになるので、それも認めない。

事実上の「帝国」によって世界が再編成される。それがポストリベラルのリアルポリティーク (現実政治) なのです。

•

三牧聖子 (同志社大学大学院教授 = 米国政治外交) 2025 年 5 月 9 日

【視点】

デニン教授の『リベリズムはなぜ失敗したのか』はアメリカ社会の行き詰まりに関する鋭い分析を含んでいたが、ここで展開されている国際秩序論には多くの疑問を感じる。

デニン氏は「ポスト・リベラル」の国際秩序を語っているというが、語られている秩序の内容は、国際法によって**戦争も占領も禁じられておらず、大国が資源や富を求めて植民地や勢力圏の獲得に汲々とし、中小国の主権や独立は守られなかった 19 世紀へと回帰したような内容**だ。むしろ、**「プレ・リベラル (リベラル以前の)」の国際秩序、という名称の方がしっくりくる。**

「ポスト・リベラル」の国際秩序というからには、リベリズムでは解決できなかった諸問題への処方箋や、よりよき国際秩序のヴィジョンが含まれていることが期待されるからだ。

もちろん、トランプ政権に多くの人脈を有するデニン氏の国際秩序観は、トランプ政権の行動を理解するには役立つ。 就任以来トランプは、19 世紀から 20 世紀にかけてアメリカの領土拡張のイデオロギーとなった**「明白なる運命 (manifest destiny)」**という標語を掲げ、グリーンランドやパナマ運河への帝国主義的な欲求を露わにしてきた。**ただ、これらの行動が、**

「腐敗したリベラルの平和的な転覆」とどうつながるのかは不明だ。少なくとも日本をはじめとする中小国から見れば、**国際秩序を悪化させるだけの行動**だ。

アメリカでも世界でも、リベラリズムが多くの批判にさらされていることは事実であり、よりよき世界を展望するために、**リベラリズムを批判的に問い直し、新たな思想をみつけていくことは必要**だ。他方で、**現在のアメリカや国際秩序で起こっている問題のすべての責任を「リベラリズム」へと押しつける議論にも、多分に虚偽や欺瞞が含まれているのではない**か。

古代ローマから今日に至るまでのリベラリズムの二千年の歴史を辿り、その行き詰まりの原因と、未来の姿を探った『リベラリズム―失われた歴史と現在』（青土社、2020 年）の著者**ヘレナ・ローゼンブラット教授**は、朝日新聞のインタビューでこのように述べている。

「反リベラルのトランプ政権のような政権が世界中で生まれている現代……**新しいリベラリズムを生み出すことが求められています。変化し、生まれ変われなければ、リベラリズムは死に絶えてしまうのです**」。

困難な世界情勢にあっては、こうした漸進的なアプローチよりも、「革命」的な主張の方がいいは魅力的に見えるのだろうが、**リベラリズムは、断罪し、捨て去ってしまうにはあまりに長い歴史と将来的な可能性を秘めている思想である**と思う。

（交論）米保守・リベラルの混迷 ジュリアス・クラインさん、ヘレナ・ローゼンブラットさん
<https://digital.asahi.com/articles/DA3S14768277.html>

•

鈴木一人（東京大学大学院教授・地経学研究所長） 2025 年 5 月 10 日 23 時 38 分 投稿

【解説】

カトリック共同体主義とでもいえるような、保守派の論客であるデニーンの思想が良く表れている記事。オレン・キャスのような「改革保守」とは少々立ち位置が違うが、それでも反リベラル、反エリート主義的な傾向が強く、アメリカのグローバルな役割よりは、アメリカの直接的利益の問題に関心が強い。

外交政策では孤立主義的な側面がありながらも、中国の覇権的な台頭については批判的でもあるが、世界秩序を維持するためにアメリカが自らの能力を使う必要はないという見方も共通する。

カトリック共同体主義は、**個人の連帯と共感を基礎**とし、リベラルが前提とする個人主義的な価値観に反発する。しかし、国際社会においては共同体に属さない人々に対して極めて排他的であるため、**帝國的な力の行使や移民排斥なども肯定する。ある種のアメリカの根底にある価値観の表れ**のようにも思える。

- 小熊英二（歴史社会学者） 2025 年 5 月 20 日 18 時 44 分 投稿

【視点】

絵に描いたような「反エリート」と「モンロー主義」の組合せなので、**いまは 19 世紀か**と思わせるような読後感である。1980～90 年代のネオコンのような潮流が衰退し、共和党が第一次・第二次大戦によるアメリカの変化を経る前の思想に逆戻りした、という見方は時々語られる。それを裏付けるかのようだ。

とはいえ**社会の実態は、19 世紀とは全く変わっている。**今のアメリカに、「古き良きコミュニティ」だの「秩序ときずな」だのが、強固に存在するとは思えない。ましてや、トランプ氏やマスク氏が「ごく普通の人々」を代表するなどというのは、美辞麗句を乗り越して**ジョークとしか思えない**。「歴史は繰り返す。ただし二度目は茶番として」という言葉を思い出す。